

Management Club Report

Nov.2012/Vol.119

Monthly Opinion 大差を生むプラス1の積み重ね

当社が行う院内研修や公開セミナーで伝えていることとは一体何なのだろうか？あるいはそれを生かすようにして医院の活性化につなげてくれている歯科医院と、生かし切れていない歯科医院との差はどこにあるのだろうか？そんなことを少し掘り下げて考えてみますと、私は新しい時代の歯科医院に必要な一つの要素が見えてくるような気がします。

その必要な要素とは一体何であるのか？それは、超高齢化社会という新しい時代を迎えた現在の日本の社会の中で、将来に向けて生き残ろうとする歯科医院が、単なる“歯の修理屋”から脱皮して“希望創出業”に向かおうとすることを支えて行くことではないかと、些か不遜ではありますが、そのように密かに思っています。

今月は、当社の果たすべき役割と、それを生かしてくれている歯科医院の、“DBMの生かし方”について見えてきたことと改めて思うところを述べてみたいと思います。

1

歯科医院における『知』の重要性

“真紀子発言”の余波

先頃、瞬間的ではありましたが、世の話題に上った“大学認可事件”によって、改めて大学教育の在り方がクローズアップされました。田中真紀子文科相の発言は、その存在感が薄れかけた頃に、世間を驚かせるようにして飛び出し、いつも物議を醸し出してくれます。

今回もまた多くの関係者の努力や尽力が無駄になりかねない、手続きを無視した突飛的な発言で、大きな問題ではありましたが、ただいつものお騒がせパフォーマンスばかりというものでなく、その指摘する根本は、我が国の『知』についてのあり方やレベルを問い直すものでもあったように思えますので、そういう意味においては一定の意義があったのではないのでしょうか。

天声人語の論評

11月6日の朝日新聞『天声人語』には次のようにありました。

「いまや大学は全国で800近くに増え、一方で少子化が進む。私大の4割は定員を割って、『広き門』を入れてくる学生の学力はおぼつかない。

それは分かるが、来春開校予定の3校を不認可にしてしまっただけでは『暴走大臣』だろう。一般論で一理あっても、3校に落ち度はない。ちゃぶ台返しをリーダーシップと勘違いしては困る。将来のための変革を言うなら、正面から変えてほしい。

昨今、大学は就職予備校のようになり、本来の教育が空洞化しているともいう。憂える人は多いはずだ。一石を投じたのを良しとして、覆水を盆に返す手も、なくはなかる